

岡山芸術交流2019

Okayama Art Summit 2019

基本計画

平成30年4月16日
岡山芸術交流実行委員会

目次

1	開催趣旨	2
	(1) 趣旨	2
	(2) コンセプト	3
	(3) ロゴマーク	4
2	開催概要	6
	(1) 名称	6
	(2) 会期	6
	(3) 会場	6
	(4) 主催	6
	(5) 方向性	9
	(6) 事業構成	12
	(7) 重点取り組み	13
3	広報	14
	(1) 方針	14
	(2) 取組	14
4	来場者対応	15
	(1) 方針	15
	(2) 取組	15
5	サポートスタッフ	15
	(1) 方針	15
	(2) 取組	15
6	連携・協賛	16
	(1) 方針	16
	(2) 連携	16
	(3) 協力・協賛	16
7	鑑賞券、オフィシャルグッズ商品	16
	(1) 方針	16
	(2) 取組	16
8	スケジュール	17

1 開催趣旨

(1) 趣旨

岡山市は災害の少なさ、温暖な気候や交通の利便性などから、近年は大都市圏からの移住先として人気が高まっています。一方で、都市の魅力の発信という点では、こうした環境面でのポテンシャルの高さを活かしてきていないという指摘がたびたびなされています。

さらに岡山市中心市街地においては、様々な施設の整備・開発が進んでいる岡山駅周辺エリアに対し、旧城下町エリアの賑わいの核としての地位が相対的に低下しており、その解決のため、中心市街地の回遊性向上や街の魅力向上が急務の課題となっています。

旧城下町エリアは、戦国末期の岡山開府以来 400 有余年の歴史を誇る岡山のルーツともいべきエリアです。そこで培われてきた文化が岡山らしさを、岡山の魅力を生み出してきたことを考えると、このエリアの賑わい復活は、中心市街地活性化に止まらない、「岡山の顔」の再生に他ならないと考えます。

そこで、私たちが着目したのが、「芸術文化のもつ創造性」です。

2016年10月9日から11月27日までの44日間、岡山城・後樂園周辺ゾーン内において、徒歩圏内の歴史・文化資源を活用した会場に最先端のコンセプチュアルアートを集結したコンパクトな展示をコンセプトとし、「開発 | Development」をテーマとした国際現代アート展「岡山芸術交流 2016」を開催しました。

会期中、延べ23万4千人が来場し、展示作品群への明確なコンセプトや、他の芸術祭とは一線を画す姿勢、「小旅行気分」「歩いて回れる手軽さ」、展示会場となった近代建築物、オリエント美術館における館蔵品とのコラボレーション展示や大型屋外展示など来場者や専門家からも高く評価されました。

「岡山芸術交流 2016」を通じ、わたしたちはアートに秘められた国境・地域・性別・世代の違いを超えて人と人、街と人をつなぐ無色透明の接着剤としての力を強く感じました。アートを通じて、国内外から岡山の街に様々な人々が集い、交わり、絆を深めあう。アートが人々の想像力を刺激し、新たな未来を創り出そうとする力をはぐくんでいく。そして人と人、街と人との新たな出会い、思いがけない組み合わせが生み出す化学反応は、新しい価値の創造のみならず、私たちの街・岡山のよさの再認識にもつながっていく。アートの力が岡山の新たな未来、新たな魅力を創り出していく原動力になると確信しています。

(2) コンセプト

○ 歩いて楽しむ

岡山城・後樂園周辺ゾーン内において、徒歩での回遊が可能な圏内に会場を複数配置したコンパクトな開催とする。

○ 資源を活かす

岡山城・後樂園・美術館・文化施設等、ゾーン内に立地する様々な歴史文化資源の特性を活かした展示を展開し、美術鑑賞と観光の融合を目指す。

○ 世界を見る

アーティストックディレクターが選定するテーマに基づき、岡山が世界からも注目を集める最先端のコンセプチュアルアート作品を集結させた展覧会を目指す。

○ 人を育む

開催を支える人材、特に将来の地域文化の一翼を担う若手人材の育成を推進する。

(3) ロゴマーク

**デザイン：ピーター・サヴィル Peter Savill**

1955年、イギリス・マンチェスター生まれ。イギリスを代表するグラフィックデザイナーで、1970年代から80年代にかけて手がけた、マンチェスターのインディペンデント・レコード・レーベル「ファクトリー・レコーズ」のジャケットのデザイン（特にジョイ・ディヴィジョン、ニュー・オーダーなど）で広く知られる。その活動は音楽関連に止まらず、アドビシステムズ、CNN、ジバンシィなどイギリス国内外の有名企業のデザインも手がける。

アーティストとしても活動しており、「岡山芸術交流 2016」では、アナ・ブレスマン（Anna Blessmann：1969年ドイツ・ベルリン生まれ）とのアーティストユニットとして、旧後楽館天神校舎会場にて「触れる作品」（Touching Work）を展示、子どもたちを中心に人気の作品となった。

デザインコンセプト：

オーケー（いいね）、岡山。

オーケー（いいね）、岡山芸術交流。

今や世界の共通言語であるオーケー。いいね、を意味する、その2文字の形と音を「オカヤマ」の英語表記と音に重ねたのが今回のロゴデザインです。オーケーという記号が表す肯定の姿勢を、岡山と岡山芸術交流に反映させ、ロゴデザインを目にした人に岡山への興味、岡山芸術交流への賛同を促します。

デザインテクニク的にはOとKの文字の間の段差に「岡山芸術交流」の言葉が挿入可能であることが特徴です。これによりロゴデザインに本来あってはならない、

ロゴと事業名との乖離という危険を防いでいるからです。色やサイズを含めた汎用性も最大限に可能にした、いわゆる使い勝手のよいデザインであることも大きな利点といえるでしょう。

さらにこのデザインは、デザイナーであるピーター・サヴィルの個性、クールでシンプルなサヴィルらしさをあますところなく発揮しているのも注目点。サヴィル自身の世界的な知名度とあいまって、国際社会においても普遍的かつ認知度の高いロゴデザインとなるでしょう。

2 開催概要

(1) 名称

岡山芸術交流 2019（おかやま げいじゅつ こうりゅう にせんじゅうく）
（英語表記） Okayama Art Summit 2019

(2) 会期

2019年9月27日（金）～ 同11月24日（日） 開館日は計51日間。
月曜は休館とする。ただし、祝日の場合（10月14日、11月4日）は、その翌日
火曜日を休館とする。

(3) 会場

岡山城・後楽園周辺の歴史・文化ゾーン内において徒歩で移動が可能なコンパクトなエリアに会場を配置する。主要会場は、旧内山下小学校跡地、岡山県天神山文化プラザ、岡山市立オリエント美術館、林原美術館、岡山県立美術館、岡山城などに加え、岡山県庁前広場などの屋外展示を検討する。（次ページ図）

(4) 主催

岡山芸術交流実行委員会

会 長 大森雅夫（岡山市長）

副会長 宮地俊明（岡山県副知事）

// 岡崎 彬（岡山商工会議所会頭）

監 事 宮長雅人（株式会社中国銀行取締役頭取）

総合プロデューサー 石川康晴（公益財団法人石川文化振興財団理事長）

総合ディレクター 那須太郎（TARO NASU 代表/ギャラリスト）

アーティストディレクター ピエール・ユイグ（アーティスト）

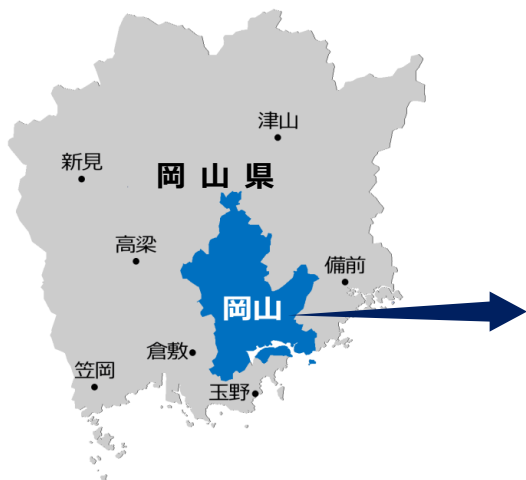
パブリックプログラムディレクター 木ノ下智恵子（大阪大学 21 世紀懐徳堂准教授）

顧 問 宮武 博（岡山市議会議長）

// 越宗孝昌（株式会社山陽新聞社会長）

// 槇野博史（国立大学法人岡山大学学長）

構成団体 岡山市・岡山市教育委員会／岡山県／岡山商工会議所／(公益) おかやま
観光コンベンション協会／岡山カルチャーゾーン連絡協議会／大学コ
ンソーシアム岡山／(株)山陽新聞社／(株)山陽放送／(株)岡山放送／(株)テレビ
せとうち(株)／(公益)岡山県バス協会／(一般)岡山県タクシー協会／西日本
旅客鉄道(株)／(株)中国銀行／(公益)石川文化振興財団



※会場候補地：数字は屋内展示、アルファベットは屋外展示。

【アーティストックディレクター】

ピエール・ユイグ Pierre Huyghe

〔略歴〕

1962年、フランス・パリ生まれ。
現在はニューヨークを拠点に制作活動中。
写真、映像、パフォーマンス等、ジャンル
を超えた多彩な作風で知られる。

2001年に参加した第49回ヴェニス・ビ
エンナーレ（イタリア）にて審査員賞受賞、
同年は第1回横浜トリエンナーレ（日本）
にも参加。2002年ヒューゴ・ボス賞受賞。
その後も2012年第13回ドクメンタ（ドイ
ツ）、2014年第10回光州ビエンナーレ（韓
国）、2017年第5回ミュンスター彫刻プロ

ジェクト（ドイツ）など数々の大規模国際展覧会に参加。2013年にポンピドゥ・
センター（フランス）を皮切りに国際的に巡回した回顧展や、2015年のメトロポ
リタン美術館（アメリカ合衆国）のルーフガーデン・コミッションなど世界各地
の著名美術館での個展多数。

2016年第1回岡山芸術交流では、頭部が蜂の巣で形成された彫刻や、仮面をかぶ
った猿の映像を含む三作品が林原美術館に展示され話題を呼んだ。イギリスのア
ートメディア Art Review が毎年発表している「Power100」（現代アート界で影響
力のある100人）2017年版で2位にランクされるなど、現在、今後の動向が最も
注目される美術家のひとりである。



Photo credit: Ola Rindal

(5) 方向性

自己発生的な超個体（スーパーオーガニズム）は暫定的設定のもと、一種の思惑に庇護されながら永続的に学習と成長を続けていく。

その超個体は他者への関心をもたない予測不可能な存在として、絶えまなく自らを改造しながら、生物と人工生命体による認知及び行動のさまざまな領域から出現する。

A self-generating superorganism is learning and growing permanently in a conditional set up, under a speculative umbrella.

Indifferent and unpredictable, it emerges from different realm of cognition and behaviors of biotic and artificial life forms, constantly modifying itself.

[参加アーティスト] (第一弾公表)

イアン・チェン
Ian Cheng

1984年、ロサンゼルス生まれ。
現在はニューヨークを拠点に活動。
モーションキャプチャーなど最先端のアニメ技術を使い、人工的に作られた事物が異種混合的に絡み合う映像作品を制作している。
近年の個展として、2018年サーペンタイン・ギャラリー(ロンドン)、2017年Moma PS1、2015年サンドレット・レ・レバウデンゴ財団現代美術館(トリノ)、デュッセルドルフ美術館(デュッセルドルフ)、2014年ミラノトリエンナーレ(ミラノ)などがある。
主なグループ展として2017年横浜トリエンナーレ、2016年リバプール・ビエンナーレ、2015年パリ市立近代美術館(パリ)、オルブライト=ノックス美術館(アメリカ合衆国)、2014年台北ビエンナーレ(台北)、2013年リヨンビエンナーレ(リヨン)、Moma PS1(ニューヨーク)、2012年スカulptureセンター(ニューヨーク)など多数。



Ian Cheng
Bag Of Beliefs (BOB)
artificial lifeform, 2018
Serpentine Gallery, London
Photo by Andrea Rossetti

ファビアン・ジロー&ラファエル・シボニー
Fabien Giraud & Raphaël Siboni

ファビアン・ジロー(1980年生まれ)とラファエル・シボニー(1981年生まれ)により結成。2007年よりパリを拠点に活動。
ドキュメンタリー、映画史、哲学、技術史を引用した作品制作を行う。
近年の個展として、2009年ガートルート・コンテンポラリーアートスペース(メルボルン)、2007年にパレ・ド・トーキョー(パリ)などがある。
近年参加した主なグループ展として、2017年リバプールビエンナーレ、2015年パラッツォ・リーゾ美術館(イタリア)、2011年コペンハーゲン国際ドキュメンタリー映画祭(コペンハーゲン)、2009年モスクワビエンナーレ(モスクワ)など多数。



Fabien Giraud - Raphaël Siboni
1922 - The Uncomputable The Unmanned Season
1, Episode 4, HD video, 26 mn, 2016
© Fabien Giraud & Raphaël Siboni

グラスビード
Glass Bead

芸術、科学、哲学といった複数の学術的、実践的、政治的な交差を考えるリサーチ・プラットフォーム。アーティスト、歴史家、理論家により構成されている。
パリとロンドンを拠点に活動。
オンライン上で記事を公開している他、本の出版、レクチャー、ワークショップなどを行う。メンバーにはファビアン・ジローが含まれている。



Glass Bead's website homepage ©Glass Bead

パメラ・ローゼンクランツ

Pamela Rosenkranz

1979年、スイス生まれ

現在はチューリッヒを拠点に活動。

映像、彫刻、インスタレーションなどを扱い、人間の実存と虚構、グローバリゼーションと消費社会の問題を扱うことで知られている。

近年の個展として、2017年プラダ財団（ミラノ）、2015年ヴェネツィアビエンナーレ（ヴェネツィア）、2010年ジュネーヴ近現代美術館（ジュネーヴ）、ブラウンシュヴァイク美術館（ブラウンシュヴァイク）などがある。

近年参加した主なグループ展として、2017年ルイジアナ美術館（コペンハーゲン）、マイン美術館（ドイツ）、2014年カルマインターナショナル（スイス）、2013年ヴァルト（ベルリン）、2008年のベルリンビエンナーレ、マニフェスタ7（イタリア）など多数。



Pamela Rosenkranz
Skin Pool, 2014
Photo credit : Stefan Altenburger

ティノ・セーガル

Tino Sehgal

1976年、ロンドン生まれ。

現在はベルリンを拠点に活動。

他人に指示を与え、従来のアートパフォーマンスの領域を踏み越えたパフォーマンス作品を発表している。

またそれらのパフォーマンスを一切記録に残さないことで知られている。

2013年にヴェネツィアビエンナーレ金獅子賞を受賞。

近年の個展として、2016年パレ・ド・トーキョー（パリ）、2015年アムステルダム市立美術館、キアスマ美術館（ヘルシンキ）、2012年テート・モダン（ロンドン）、2010年グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）。近年参加した主なグループ展として、2014年ヴェネツィアビエンナーレ/建築（ヴェネツィア）、2013年ヴェネツィアビエンナーレ（ヴェネツィア）、2012年第9回上海ビエンナーレ（シャンハイ）、ドクメンタ13（カッセル）、2010年光州ビエンナーレ（光州）、2007年リヨンビエンナーレ（リヨン）など多数。

NO IMAGE

Annlee, 2012
Dimensions variable
Ishikawa Foundation, Okayama

(6) 事業構成

① 現代アート展

本国際展のテーマを体現する現代アート（コンセプチュアルアート）作品の制作及び展示を行う。アーティストの選考は、総合ディレクター・アーティストディレクターが行う。

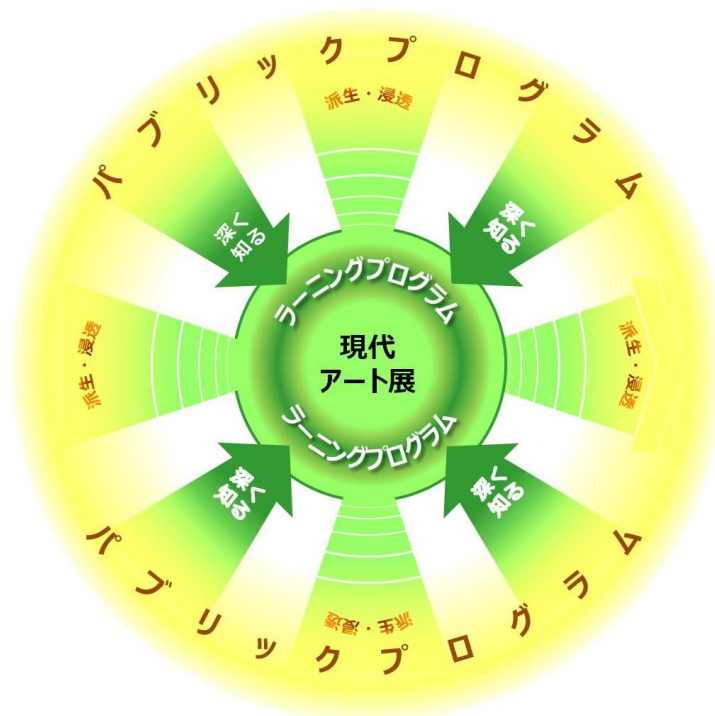
屋外展示となるものを除き、原則有料鑑賞とする。

② ラーニングプログラム

岡山芸術交流の参加作家の作品や展覧会展示作品を素材とし、展覧会テーマや展示作品をより深く掘り下げて理解してもらうためのプログラムを実施する。

③ パブリックプログラム

岡山芸術交流が地域に開かれ、浸透し、持続・発展していくため、市民・県民が展覧会により親んでもらうための各種プログラムを実施する。展覧会への来場のきっかけづくりとしての役割も担うプログラムとして、本展会場以外の場においても広く開催する。



(7) 重点取り組み

① 地域への浸透

市民・県民、産業界、教育機関、文化団体など様々な主体の参画を促し、地域への一層の浸透を図る。

② 学校鑑賞の強化

前回開催において好評であった県内小学校・中学校の校外学習による鑑賞の支援を強化する。併せて高等学校や創造系の専門学校、大学への鑑賞の働き掛けも積極的に行う。

③ 運営を支える人材の育成

「岡山芸術交流」の運営を支える人材の育成を強化する。特に地元企業に加え、市民・県民、学生の参加を増やすとともに、芸術交流運営に係る内容のほか、独自イベントの実施、まちづくり・観光など幅広い分野の研修を行うなど活動内容の充実を図る。

④ 海外への発信

国内外、特に海外への発信を強化し、世界的な現代アート国際展としての「岡山芸術交流」の評価の確立・浸透に努めるとともに、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催による日本への注目度の高まりも見据えて、開催地・岡山の魅力発信も併せて展開し、海外からの誘客に結び付ける。

3 広報

(1) 方針

国内外への発信を強化し、世界的な現代アート展としての「岡山芸術交流」の評価の浸透・確立を目指すとともに、国内外からの誘客及び多様な主体の参画に結び付けていくことを目的とする。

(2) 取組

展覧会への来場、各種プログラムへの参加、サポートスタッフへの参加促進のため、岡山県内に対しては、行政・教育機関・報道機関・交通機関等様々なルートを通じた広範囲の情報発信を行う。

国内に対しては、岡山県・岡山市・交通事業者が実施する観光プロモーション等とも連携した広報活動を展開するとともに、前回2016年開催において県外来場者の大半を占めた首都圏・関西圏地区に対して積極的なPR活動を行う。

また、芸術交流のコンセプト、開催について国際的な評価を広く定着させるため、海外向け広報の強化が必要である。ヨーロッパ・アメリカのアートメディア、インフルエンサー、ツーリスト向け情報発信を行うとともに、誘客を図る面から、岡山と直行便によって結ばれ、訪問観光客が多く、またビエンナーレの開催が盛んな台湾・香港・韓国を中心に東アジア地域へのプロモーション活動及び情報発信を強化する。

4 来場者対応

(1) 方針

会場が複数施設に設定され、徒歩圏内ではあるものの、施設間が数百メートルの距離で点在し、また会場に隣接して観光施設・文化施設が数多く立地しており、これらの施設も併せて楽しめることが岡山芸術交流の重要なコンセプトのひとつであり、魅力でもあるため、来場者が効率よく、かつ、スムーズに鑑賞ができるようにすることが重要である。

(2) 取組

中核会場には、ビジターセンターを設置するとともに、玄関口である岡山駅においても情報提供や来場者対応が行えるように検討する。また、ガイドブックやウェブサイト、モバイルサイト、モデルコースの提供等を通じて効率よく鑑賞ができるように検討する。

なお、海外からの来場者も多数見込まれることから、多言語対応、インターネット無料接続サービスの提供についても考慮し、取り組む。

5 サポートスタッフ

(1) 方針

岡山芸術交流 2019 会期中の運営サポートをはじめ、来場者の方々に芸術交流鑑賞とともに岡山の街を楽しんでいただくための「街のコンシェルジュ」となり、ともに芸術交流を盛り上げていく人材育成に取り組む。

(2) 取組

市民・県民や学校・文化団体・地元企業、幅広くサポートスタッフを募集する。会場が岡山を代表する歴史文化ゾーンであるため、芸術交流の開催内容のみならず、イベントの企画・運営、まちづくり・観光的な要素についてもカリキュラムを編成し研修を行う。また、会期中には、会場の案内、作品看視、ビジターセンター対応のほか、サポートスタッフ企画イベントの実施や開催の記録（撮影）など活動の幅を広げていく。

6 連携・協賛

(1) 方針

岡山芸術交流 2019 の開催を通じて、文化芸術団体や企業との連携・協力を進めていくことにより、開催の効果を会場周辺エリアを超えて広く波及させ、地域全体の盛り上げを図る。

(2) 連携

岡山芸術交流 2019 と同時期に開催される、瀬戸内国際芸術祭などの現代アート国際展や、芸術交流と親和性の高いイベントあるいは県内で開催される文化・芸術イベント等と広報面を中心に連携・協力を図ることで相乗効果を生み、互いの地域の盛り上げにつなげる。

(3) 協力・協賛

岡山芸術交流の開催趣旨に賛同する企業に対し様々な形での協力・協賛を働きかけ、パートナーシップを築いていくことで、芸術交流の地域への浸透を図っていく。

7 鑑賞券、オフィシャルグッズ商品

(1) 方針

来場者が、会場を回遊できるような利便性の高い鑑賞券制度を検討する。また、岡山芸術交流 2019 の鑑賞記念となるようなオフィシャルグッズを開発・販売する。

(2) 取組

鑑賞券の会場区分（有料・無料）、券種（一般、学生、団体、前売りなど）、割引制度、有効期間・販売期間・場所等について、前回の実績・課題を踏まえ企画検討を行う。また、芸術交流のロゴマーク、2019 メインビジュアル等を用いたグッズの開発や、関連グッズの取扱いを検討する。

8 スケジュール

2018年	4月	基本計画 公表			
	5月				
	6月				
	7月		海外/国内広報	プログラム	
	8月				
	9月				
	10月				サポートスタッフ
	11月	実施計画 公表	ウェブサイト	募集	
	12月				
2019年	1月				育成
	2月				
	3月				
	4月				
	5月	詳細企画 公表	本サイト		
	6月				鑑賞券
	7月				
	8月			活動	
	9月				
	10月	9月27日 11月24日	岡山芸術交流 2019 会期		
	11月				
	12月				

本計画についてのお問い合わせ

岡山芸術交流実行委員会事務局

〒700-8544 岡山市北区大供一丁目 1-1 岡山市役所本庁舎3階

TEL: 086-221-0033 | FAX: 086-221-0031 | E-MAIL: info@okayamaartsummit.jp

WEB: www.okayamaartsummit.jp